

# 日韓の近代化過程の比較と言語の役割： 既存研究から学ぶ

李松

(拓殖大学大学院経済学研究科国際関係専攻博士後期課程)

## 【要約】

本稿は日本と韓国の近代化について既存の近代化に関する研究業績に基づき、その比較・検討を行った。欧米とともに世界経済を牽引してきた日本、外国勢力の侵略と植民地統治を受け、回復の可能性すらなさそうだった国が北東アジアの先進国の一つとなった韓国、この両国はどのように経済発展を成し遂げ、現在に至るまでどういった試行錯誤を経験したのだろうか。

この疑問点に対する回答の第一歩は、日韓の近代化が進んだ過程と対応、そしてその影響を理解することであろうと考える。また、近代化の過程において特に言語と教育の役割に注目する。国家を維持して発展していく過程で言語と教育が担う役割は極めて大きい。近代化は西欧によって先行され、他の国はこれをモデルとして発展を追求していった。そのような姿は言語・教育的な面でも同様である。そのため、日韓の近代的言語・教育の側面から特殊性を考察することで、日本が早い時期に近代社会を構築した根本を把握することができると思う。

キーワード：近代化、経済発展、言語、教育、日韓関係

## 一 はじめに

本稿は日本と韓国の近代化について、従来の近代化に関する研究業績にもとづき、日韓の比較を行い、考察するものである。

目覚ましい経済発展を遂げ、国際社会でその地位を認められ、欧米とともに世界経済を牽引してきた日本、外国勢力の侵略と日本の植民地支配、そして朝鮮戦争による飢えに苦しみ、あらゆる部分で回復の可能性すらなさそうだった国が“漢江の奇跡”と呼ばれるようになり、北東アジアの先進国の一つとなった韓国、この両国は果たしてどのように目ざましい経済発展を成し遂げ、北東アジアを導く強国となり、どういった試行錯誤を経験したのだろうか。

この疑問点に対する回答の第一歩は、日韓の近代化が進んだ過程と対応、そしてその影響を理解することになると考えられる。日韓の近代化の過程は、従来の中華思想を中心にしていた日中韓三国の秩序を完全に变化させ、伝統的な秩序が激変した時期である。両国の近代化の過程の性格、速度を異にする近代化過程を調べると同時に、近代化過程におけるそれぞれの対応が近代化にどのような影響を及ぼすようになったのかを考察する。

また、近代化の過程において特に言語と教育の役割に注目する。国家を維持して発展していく過程において言語と教育が担う役割は極めて大きい。近代化は西欧によって先行され、他の国はこれをモデルとして発展を追求していった。そのような姿は言語・教育的な面でも同様である。そのため、日韓の言語・教育の近代化過程の特徴を考察することで、日本が早い時期に近代社会を構築した根本を把握することができると思う。

以下では、まず日韓の近代化が始まった段階の動きに関する業績をみて、次にその後の発展に関する業績をまとめ、最後に言語・教

育の近代化に関する業績を分析していく。

## 二 日本と朝鮮の近代化の出発点

### 1 近代化とは

「近代化」について述べるにあたり「近代化」とは何かを明らかにする必要があると思う。今日、「近代化」という言葉については、これまで学界では関連の定義や学説がたくさん出ているが、まだその概念規定や内容に関しては一致した見解がない。そのため、「近代化」の意味は、場合によっては、西欧化、工業化、民主化、合理化、都市化など多義的に使われている。あるいは、最近は改革や発展といった意味で使われることもある。

また、「近代化」とは、政治、経済、社会、文化などのあらゆる社会生活を機能的に細分化するものや、それらを含む社会全体とその中で生活する人間の意識と行動が合理的、計画的、機能的、組織的な性質に変化させる過程を指す場合もある。これは歴史的な観点からみると、中世封建社会から資本主義社会への転換の過程を意味し、一般的には社会の様々な要素の変化を含む包括的な変動過程を意味しているといえる。

「近代化」の内容としては、科学と技術の発達を土台として大量生産と大量消費をもたらす工業化と、それによって生じる産業中心地の人口移動、人口集中、都市形成による生活様式の変化を伴う都市化、またその他の様々な変化を指す。こうして工業化、機械生産の導入により産業構造が高度化しただけでなく、政治、経済、社会、文化全般にわたって人間の生活構造を根本的に変化させることになる。

世界的に近代化に関する研究は多くあるが、代表的な理論にはマ

ックランド (D. McClelland)、ロストウ (W. W. Rostow)、ロジャース (Everett M. Rogers) の理論などがある<sup>1</sup>。本稿では特に経済発展と言語・教育問題に関連するいくつかの研究を取り上げ、分析していく。

まず、富永健一『日本の近代化と社会変動』では「近代化」という言葉の字義上の意味は、「近代的」になること (becoming modern) である。では、「近代的」とは何か。日常用語の上でこの語が用いられる際の語義は非常に多様であるが<sup>2</sup>、ここではまずそ

---

<sup>1</sup> D. McClelland, *The achieving society* (Princeton, N. J. : Van Nostrand, 1961); W. W. Rostow, *The Process of Economic Growth* (London: Oxford University Press, 1952); Everett M. Rogers, *Diffusion of innovation* (New York: Free Press, 1962) を参考。

<sup>2</sup> (一)「新しい」：近代的の逆が「古い」の意味になることから、時間的な新しさ、つまり旧態然でないことが近代的であるとされる。たとえばコンピューターの導入は近代化である。(二)「進歩した」：単に時間的に新しいというだけでなく、時間軸が同時に進歩の軸を意味する。たとえば馬車より汽車が、汽車より飛行機が、近代的である。(三)「機械文明」および「工場生産」：産業革命史において、手動の織機から動力で動く力織機への変化、また織物業が農家の家内生産から工場生産へと移行することは、織物業の近代化である。この場合の近代化は産業化と重なりあっており、このことは産業化が近代化の重要な要素の一つをなすことを示す。(四)「資本家的」ないし「ブルジョア的」：上記(三)の近代化を担った人たち、すなわち歴史的に資本家、中産階級、ブルジョア、市民などと呼びならわされてきた人たちが、社会の中核的な位置を占めるようになることが近代化である。(五)「封建的でない」：上記(四)の人たちは、当然に封建社会の担い手たちに対立する。この場合、封建的というのは旧秩序の代表とみなされ、これを否定することが近代的とされる。(六)「民主的」：家族内の社会関係が家長の専制によるのではなく、夫婦の対等な結びつきによるものである時、その家族を近代的と呼ぶ。この場合日常用語のレベルでは、家長の専制を「お父さんは封建的だ」といったりする家父長制は封建制の産物でなく、古代からあるものだから、この言い方は専門用語としては誤用であるが、民主的なのが近代的で、その反対は封建的だという連想から、この誤用が生じた。(七)「科学的」ないし「合理的」：カンやコツにたよらずに科学的知識をもとめること、感情的要素を取り除いて理性的に思考すること、因習への埋没から離れて機能的に行為すること、

れらが用いられる文脈を、富永健一は次の二つに区分することから出発することにした。

第一に、それは歴史上の時代区分としての「近代」(the modern time)を意味する。この用法は歴史家によるものであって、具体的な歴史事実、それもとくに近代化という歴史過程がそこで始まった場所である西洋の歴史事実にかかわる。

第二に、それは第一の意味の近代をより抽象度の高いレベルにおいて特徴づけるような、「近代的なもの」(the modernity)を意味する。この用法は理論的な社会科学上の概念であって、第一の用法における西洋史上の歴史事実としての近代から抽出された近代的なものが今日では西洋以外の諸社会にも広がりつつあることに着目することによって、西洋という特定の場所を離れたより一般的な概念化をめざす<sup>3</sup>、と論じられている。

以上のように「近代」または「近代化」という言葉は、幅広い分野と多様な意味を持つ。本稿では時間の流れによる社会的な変化と、それに伴う言語の変化を歴史事実を基に考察することから、「近代」「近代化」を歴史的な時間軸に沿って考えていく。

## 2 日韓の近代化の出発点

18世紀から19世紀まで日本、朝鮮、中国は全体的に西洋社会に

---

その他、要するに目標達成に向かって最も効率の高い方法を選んで、それ以外の來雜物を取り除くのが近代的とされる。(八)「個人の自由と自我の確立」：伝統やしきたりによって個人が束縛されている状態から、個人がみずからの責任において自主的にみずからの行動を律する状態への移行を近代化という。また、内部に自律的な自我をもっているようなパーソナリティタイプを近代的人間と呼ぶ(富永健一「近代化」『ブリタニカ国際大百科改訂版』第五巻〔1988年〕、771～775ページ)。

<sup>3</sup> 富永健一『日本の近代化と社会変動』（講談社、1991年）、28ページ。

比べて近代化という意味では遅れをとっていた。西欧列強は産業革命以降に急激に発展し、初期ヘゲモニー国家である英国を筆頭に帝国主義国家へと成長していた。それは自国の物質文明を国外に表出する時代でもあった。

E・O・ライシャワー『アジアの中の日本の役割』によると過去数世紀のアジアでは、ヨーロッパ列強による植民地支配はなんら新しいことではなかった。外国による征服といった事態は、ほとんどのアジア諸国の歴史の一部になっていた<sup>4</sup>。これによって、アフリカ大陸とアジア大陸は、大きな時代的变化を経験することになった。このような変化は、開港前後に起きるが、西欧の衝撃による変化を経験する以前まで、中国が中華思想に立脚した国際関係を構築していた。当時、朝鮮はこのような中華思想に追随し、日本は対外関係をほとんど断った状態であったが、長崎の出島でオランダと交易をし、中国や朝鮮半島とも貿易交流があった。

西欧文明との出会いは、日本、朝鮮、中国にとって大きな衝撃であった。このような変動の中で、各国のそれに対する対応は明確に異なっていた。この違いがその後の帝国主義<sup>5</sup>か植民地か、あるいは半植民地かの違いを導いたのである。

朝鮮の近代化が遅れた原因の一つは、開港時期にあるといえる。開港の時期は韓国より日本が 22 年も先であり、また、西欧諸国との通商条約締結も 18 年早かったのである。1882 年、朝鮮が初めてアメリカと米朝修好通商条約<sup>6</sup>を結んだのに比べて、日本は 1854

---

<sup>4</sup> E・O・ライシャワー(西山千、伊藤拓一訳)『アジアの中の日本の役割』(徳間書店、1969年)、83ページ。

<sup>5</sup> 自国の政治的・経済的支配権を他の民族・国家の領土に拡大させようとする主義。

<sup>6</sup> 1882年(高宗19)、朝鮮と米国の間で締結された国交と通商を目的とした条約。1876年、朝日間で日韓通商関係が成立し、朝鮮が日本に開港すると米国も朝鮮と

年に開国しており、実に 28 年という時間差がある。また、オ・ソンジェ(오송제)『근대 중국의 개항 도시와 동아시아』(近代中国の開港都市と東アジア)の研究では、以下のように述べられている。中国はアヘン戦争(1840年～1842年)における敗北から、世界資本主義体制の枠組みの中に強制的に入れられるようになった。しかし、旧経済体制の頑強な抵抗によって、すぐに近代的な資本主義的経済発展を育む体制が創出されたわけではなく、長年にわたる中華意識により旧体制の正統性に固執していたのである。

一方、明治維新前後の日本社会の変動は、近代化の成功モデルと評価されている。19世紀半ばに日本の近代化の契機となったものは1854年の日米和親条約締結であった。西欧帝国主義による資本主義的世界体制への強制的編入を意味する開港という対外的危機は、徳川幕府体制の国家権力と権威を決定的に衰退させ、対内的な危機が生じた。そのため、開港以来の日本の優先的課題は、開港時に西欧諸国と交わされた不平等条約体制から脱却し、対外的な自主独立の維持や内部の政治的統合による近代国民国家、民族国家の樹立に置かれた<sup>7</sup>。

富国強兵と文明開化のかけ声は、日本の近代化の目標を鮮明にみせてくれた。ハ・ウォンホ(하원호)の『동아시아의 세계체제 편입과 한국사회의 변동』(東アジアの世界体制編入と韓国社会の変動)の研究では、次のように論じられている。朝鮮では1876年の「日朝修好条規(江華島条約<sup>8</sup>)」締結以来、その社会的課題は対

---

の修交を急ぐようになった。

<sup>7</sup> 오송제(オ・ソンジェ)『근대 중국의 개항 도시와 동아시아(近代中国の開港都市と東アジア)』(인천[仁川]:인하대학한국학연구소[仁荷大学韓国学研究所], 2012年)、119～142ページ。

<sup>8</sup> 1876年2月、韓国の江華島で朝鮮と日本の間で締結された条約。条約の正式名称

外的自立と反封建および、近代化であった。列強の侵略と収奪に対抗して民族自主権を死守しながら、社会的改革を断行し、近代民族国家に変えようとする努力が多くの方で行われた<sup>9</sup>、という。

朝鮮王室は、王室独自の近代化措置を講じ、保守的な両班階級<sup>10</sup>は、「衛正斥邪<sup>11</sup>」思想で武装して彼らなりに祖国を守ろうとした。一方、知識層と新進官僚は開化と改革思想に立脚して近代化を推進した。しかし、その目標を達成する方法、ひいては近代化と自立をどう結合させるのか、どこに焦点を当てるのか、という点については政府や知識階層、民衆の中にもギャップがあった<sup>12</sup>。

### 三 日韓の近代化の動き

#### 1 日本の近代化

日本の近代化の成功という結果的視角から多数の学者は、近代化の成功要因を16世紀の東アジアの変化に見出している。16世紀の東アジアは、全体に大きな変化が生じた。その時期に中国では王権が交代し、日本では徳川時代が始まり、朝鮮もそれ以前とは異なる社会構造へと変化し始めた。E・Oライシャワの『日本近代化論』

---

は「日朝修好条規」または「丙子修交条約」とも言う。

<sup>9</sup> 하원호 (ハ・ウォンホ) 『동아시아의 세계체제 편입과 한국사회의 변동 (東アジアの世界体制編入と韓国社会の変動)』 (서울 [ソウル] : 중앙대학중앙사학연구소 [中央大学中央史学研究所]、2008年)、1~46 ページ。

<sup>10</sup> 朝鮮王朝時代の社会におけるエリート階級。

<sup>11</sup> 朝鮮後期、外国の勢力や文物が浸透すると、これを排斥して儒教の伝統を守ることを主張した。伝統的な社会体制を固守することが目的だったために開化思想にも反対する。

<sup>12</sup> 李松 (イ・ソン) 「韓国における言語・教育政策からみた経済発展と近代化—開港前後 (19世紀) から韓国併合直後 (1920年まで) を中心として」 『経済学研究 : 経済・国際・地域』 通巻第46号 (2019年3月)。

の研究では日本は以下の3つの重要な変化を経験したという見解が論じられている。

第一に、16世紀の日本は中国中心の国際体系の中で、ある程度の自立性を確保したという点である。第二に、日本はほぼ同時期に西洋と接触することになった点である。1543年、ポルトガルの難破船が日本に漂着し、彼らは2発の火縄銃を日本に渡すことになる。戦国時代の内乱という状況を背景に、この武器は急速に伝わり、西欧の文物を受け入れるきっかけとなった。そして17世紀に入って幕府が鎖国をしたが、オランダとは貿易関係を維持することで、日本は16世紀以来、東西ともに自由権を行使することができた。

最後に近隣の弱小国に対して自国中心の貿易体系を形成し始めたのもこの時期であった。隣国に対する貿易体系の適用は自立性の確保と、19世紀に向かう過程で重大な影響を与える。それは成功を収める日本近代史の歴史的条件になるとされる<sup>13</sup>。

17世紀、日本の初期資本主義の特徴は、自生的発展要素がまだ成熟していない後進的社会であり、欧米資本主義の強力な圧力に主体的に対応していく中で発展していく封建制、すなわち、幕藩体制という政治的に特徴的な状況であったことが挙げられる<sup>14</sup>。高橋豊『日本の近代化を支えた文化外交の軌跡』によれば、このような封建制を経て、明治維新を通じて日本では近代国家を建設するために制度的革命と近代的な貨幣改革、近代産業の多様な育成が成し遂げ

---

<sup>13</sup> 이광석 옮긴이 (イ・グァンソク 訳)、E.O. 라이샤워 (E.O. ライシャワー) 『일본근대화론 (日本近代化論)』 (서울 [ソウル] : 소화출판사, 1997年)、87ページ。

<sup>14</sup> 古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』 (京都大学人文科学研究所、1994年)。同書は緑蔭書房より1996年に再刊。

られ、資本主義化に向けた基礎整備が行われる。その後、1880年代中頃以降、かつてイギリスが経験した産業革命を経て資本主義的社会が成立していった。

まず、政治的な変革であるが、封建的な支配体制としての幕藩体制を打破し、近代的な国民国家建設を具現すべく明治維新によって実現された。これによって登場した中央権力が天皇を中心とした絶対主義的、権威主義的な性格を以て、新しい経済制度と産業技術を導入することで資本主義を追求していった<sup>15</sup>。

江戸幕府の時代が続く中、日本は中国がアヘン戦争で西洋列強に敗れる過程をオランダ等を通じて理解していたため、他の東洋国家とは違って素早く社会改革の動きを見せた。

この時、幕府を治めていた将軍に代わる者として天皇が浮上し、この過程で天皇を尊重して西洋の蛮夷を退けようという尊王攘夷運動<sup>16</sup>が起こるようになる。これらを背景に幕府が打倒され、再び天皇が主役として登場をするようになった時期が明治維新(1868年)であった。明治維新以降、日本は新たな改革のために岩倉使節団を西洋に派遣し、使節団は英国、フランスなど欧州を訪問し、陸軍、海軍、法学、警察など欧州諸国の制度を日本に伝える。

それに対してハン・ギュヨン(한규영)『일본의 경제근대화와 고도 성장 요인의 사적고찰』(日本の経済近代化と高度成長要因の史的考察)では以下のように論じられている。社会的な改革から中央集権的政治体制を確立した維新政権は近代化を国家目標として

---

<sup>15</sup> 高橋豊『日本の近代化を支えた文化外交の軌跡』(福村出版、2015年)、65ページ。

<sup>16</sup> 徳川幕府末時代に起きた政治運動で、天皇を敬おうという「尊王論」と異民族を退けようという「攘夷論」の運動をいう。

追求するようになった。そのため、封建的な身分制度を撤廃し、幕藩体制下の身分制度や賤人身分を廃止した。その結果、華族、平民程度にあいまいな段階に分けた身分制度の改革上の不徹底さが、相互間の婚姻養子縁組を許容することにより、実質的に平等化された。また、武士階級の勢力は徴兵制の導入によって失われ、彼らの経済的基盤も崩壊した。このため、最終的には彼らに一定の資金を支給した。これは急激な改革による社会的な摩擦を減らす意図で行われた。また、租税制度も地租が現物から貨幣へ転換し、土地の範囲や土地価格に従って課税され、また、土地占有者から土地所有者に変わった<sup>17</sup>、という。

貨幣改革による近代的なデノミネーションは、金融面で工業化政策を支えるものとして極めて重要であった。それは、多様な貨幣制度を全国的に統一して、商人、高利貸しの手蓄積している資金を商業資本に転換する制度的基盤になったのである。このような状況の中で、近代的な産業技術の移植、育成は初期には政府主導下で広範に推進された。政府は西欧資本主義の文物の受け入れを通じて文化、思想などの近代的な転換を文明開化運動とともに基本政策として新興産業育成を実現させようとした。

基礎条件の整備過程を経た日本資本主義は 1880 年代後半、産業革命を経て確立した。すなわち、綿紡績工業における機械的工業の成立が農業と結びついていた自給的家内工業をなくし、商品経済を全社会的に拡散させることで産業革命がなされた。

産業革命が展開して、日本は近代的な銀行制度の確立と株式市場

---

<sup>17</sup> 한규영 (ハン・ギョヨン) 『일본의 경제근대화와 고도 성장 요인의 사적고찰 (日本の経済近代化と高度成長要因の史的考察)』 (전라북도 [全羅北道] : 군산대학교 지역개발연구소 [群山大学校地域開發研究所] 1998年)、203~225 페이지。

を発達させた。普通銀行は次第に本格的な発展を遂げ、資金力が拡充し、経営も近代的なものへと発展した。1897年、日本銀行が個人取引を開始、企業に対しても銀行が直接貸付することで、預金利子が上昇するなど、銀行の熾烈な競争に発展した。このような中、預金が急増し、短期から長期までの産業資金まで供給するようになった。しかし、石井寛治『日本の産業革命—日清・日露戦争から考える』をみると日本は日清・日露戦争後、経済的不況に襲われた。戦争を支えるため日本銀行が資金を放出したのだが、その戦費が莫大な額であったためである。だが日本政府は、外国の期待に反して外債にまったく頼らなかった。政府は近代的交通体系と近代的金融機関が、後進国日本の産業革命を促進するうえで決定的な役割を果たすと考えており、その整備のための努力を重ねていた<sup>18</sup>、と論じられている。その後、企業が勃興し、個人的な調達能力を超過することができる資金の育成策として株式会社が現れた。

一方、土地制度と農業技術の変革により、農業の近代化が図られた。まさに日本の資本主義の発展においては、政府の役割が大きかったといえる。

## 2 朝鮮の近代化

朝鮮が1876年に西欧に門戸を開放したのは日本に比べてかなり遅れていた。この時、日本は西欧式の帝国主義大国に変貌すべく政治、経済変革が始まった後であった。また、日本では明治維新以後、強力な政府主導の近代化計画が実行されていたが、一方、朝鮮は近代的な基礎が形成されなかったため、近代化の過程は遅くなる

---

<sup>18</sup> 石井寛治『日本の産業革命—日清・日露戦争から考える』（朝日新聞社、1997年）、99～102ページ。

しかなかった。西欧の資本主義文化が朝鮮に流入したことが1876年の開港以降であるとしたら、朝鮮の資本主義は100年の歴史といえる。

朝鮮の政治、社会制度に資本主義文化が導入されはじめた時は、封建的体制から開化期に至る過渡期的な時期であった。この時代の身分の変化は以前より大きかったが、依然として階層移動は厳しく制限されており、両班（ヤンバン）中心の社会体制が続いた。経済も政府主導下の官僚中心の経済政策（主に農業）が形成されたが、商工業の発展に対する経済政策は微々たるものであった。また、旧韓末の改革を主導した勢力は「東道西器論<sup>19</sup>」という改革理念が強く、西欧の技術は重視していたが、彼らの考え方、文化などに対しては過去の封建的伝統を脱することはできなかった。

日本の近代化に明治維新（1868年）という契機があったように、朝鮮の近代化には甲午・乙未改革（1894年）の転換点があった。甲午・乙未改革の背景は1894年、東学農民運動<sup>20</sup>に対処すべく政府が清に援助を要請する。その際、農民軍鎮圧のために清と日本両者が朝鮮内に入ってくることになる。その際、明治維新以降、急速に国力を増強した日本が親日派と結び、朝鮮の改革に対する主導権を握った。

---

<sup>19</sup> 「東道西器論」とは、朝鮮の伝統的な思想や価値観、文化や風習などの東道を守りつつ、西洋の技術や器機などの西器は受け入れようとする主張である。伝統文化の優越性を前提に、西洋文物の選択的な受容を主張したという点で、中国の「中体西用論」、日本の「和魂洋才論」と同様の性格である。

<sup>20</sup> 朝鮮の高宗（コジョン、朝鮮第26代王）時代の1894年に東学教導と農民が力を合わせて起こした社会改革運動である。農民軍は一時、全羅道一帯を占領し、自ら統治して改革に乗り出したが、日本軍と官軍に敗れ、失敗に終わった（「동학 농민 운동 (東学農民運動)」NAVER、<https://terms.naver.com/entry.nhn?docId=3560090&cid=47306&categoryId=47306>）。

日本は「甲午改革」という名で、多様な西洋式制度を朝鮮に導入した。これは外国勢力の朝鮮侵略のための準備過程に過ぎなかったが、甲午改革は朝鮮の近代化への時代を切り開いた。改革の内容を見ると、王室と議政府の職務を分離し、科挙制を廃止して近代的な官僚制を開始し、封建的で非人間的であった身分制度と奴婢制度などを廃止して身分平等にしていく。また、ここで、電気技術が導入されたことで電話、電車、列車など交通、通信手段が変化して、生活の便利さをもたらした。

ただし、この時期の近代化は首都を中心に行われたため、王族や既得権層のためのものが多かった。甲午改革以降の近代化は近代的思想の導入時期であり、エリート階級の近代化の時期であったと考えられる。近代的な思想と技術などが導入され、朝鮮でも近代化に対する熱望が高まった。

しかし、韓国併合以降、朝鮮では日本の植民地下での近代化が進むようになる。この時期には、京城（現在のソウル）をはじめ釜山（プサン）、元山（ウォンサン）、益山（イッサン）、群山（グンサン）、大田（テジョン）など、交通の中間地域と貿易地域の村里が近代都市に発展することになる。

渡辺利夫『脱亜論』では次のように論じられてる。韓国の発展基盤形成について、現代の韓国人になお強い鬱屈を与えているのが韓国併合である。しかし、韓国人は誰も語りたがらないが、この併合によって韓国の歴史に例をみなかった強力な発展基盤が整えられたことは疑いようがない。この事実を端的に示すものが、韓国併合によって生じた人口の劇的な増加である。

韓国併合時、明治43年（1910年）の韓国の総人口は1313万人であったが、昭和17年（1942年）には2553万人となった。ちなみに、李朝時代末期の人口は年率数%も減少した年が何度もあった

のだから、併合後の人口増加はやはり劇的である。この人口増加を支えたものが、韓国の経済社会の持続的な近代化である。人口増加をもたらした要因は、まずは農業の近代化であった。第三代韓国統監で初代朝鮮総督であった寺内正毅は、米、綿作、養蚕、畜産の四部門で技術者養成と研究開発のために、往時の日本の農会法に準じる朝鮮農会法を発布、施行した。可耕地拡大が積極的になされ、併合前、田畑を合計した可耕地の総面積は247万町歩であったが、併合後の大正7年（1918年）には434万町歩となった。特に、米増産に格別の努力が注がれ、大正13年（1924年）には、併合直前の二倍の増産が可能となった<sup>21</sup>。

また、石井寛治『日本の産業革命一日清・日露戦争から考える』をみると渋沢栄一が、韓国での鉄道建設に努力したのは、なによりも当時の財界の最高指導者としての立場に基づくものであったが、同時に渋沢の経営する第一銀行（1896年、第一国立銀行を改組して設立）が、銀行券の発行特権をもっていた国立銀行の時期から、朝鮮に支店を設けて盛んに活動していたこととも関係があった。1878年には早くも釜山支店を開設し、以後つぎつぎと朝鮮各地に支店を開設した。日清戦後には同行韓国諸支店の預金残高は、同行預金総残高の10%台を占め、利益も10%台が韓国諸支店から生み出されていた<sup>22</sup>。

その際、日本は朝鮮に工場を建てて鉄道を作り、また、刑法、民法、警察制度などを導入した。そのため、ある程度の高いレベルの労働力が必要となり、初等教育などを朝鮮の人々に受けさせた。結

---

<sup>21</sup> 渡辺利夫『決定版・脱亜論』（育鵬社、2018年）、197ページ。

<sup>22</sup> 前掲『日本の産業革命一日清・日露戦争から考える』（朝日新聞社、1997年）、113～118ページ。

果的にはこのような近代的な制度の導入が朝鮮の近代化に役立ったと考えられる。しかし、甲午改革以降の近代化と同様に植民地時代の近代化もまた都市とその近郊では進んだが、全体的な近代化は果たせなかった。

イ・ミョンギョ(이명규)『한국경제의 이해』(韓国經濟の理解)では、次のように述べられている。朝鮮の經濟構造からみると朝鮮の都市ができるようになった要因は、政府と官僚が権力の中心地に居住しようとしたためであった。地方に居住していた両班が都市に移動することにより、彼らに食糧、燃料、その他の物資を供給するため、市場(シジャン)と輸送手段が必要になったのである。このように相当数に達した人口が都市に居住することで、必然的に商業制度の必要性が発生したが、実質的な意味で韓国には二つの相互に関連した商業網があった。

その一つは、村落民が彼ら同士で交易をする一方、彼らの生産物を近くの邑(村)の市場へ持って行き、隣町の生産物と交換する市場制度である。もう一つの市場制度は、ソウルとその他の都市に対する物資供給と関連したものであり、総督府はこのような交易で相当な役割を果たしたが、次第にその役割は減っていった。例えば、多量の糧穀は政府所有の土地から供給され、また多くの手工業製品は総督府が支援する手工業者から供給された<sup>23</sup>。

パク・ギョンロ他(박경로외)『한국의 무역 성장과 경제, 사회 변화』(韓国の貿易成長經濟、社会変化)では次のような見解が論じられている。朝鮮の貨幣經濟の台頭は、朝鮮商業が高度化したことを現している。17世紀に至るまで韓国には真の意味での通貨は

---

<sup>23</sup> 이명규(イ・ミョンギョ)『한국경제의 이해(韓国經濟の理解)』(경기도[京畿道]: 법문사[法文社]、2006年)、110ページ。

なく、織物や穀物が通貨の役割を果たしていた。17世紀末から18世紀初めに韓国は中国のお金を模倣して貨幣制度を設けたが、こうした貨幣は主に大きな都市で流通し、地方では使用が都市よりはるかに少なかった<sup>24</sup>。貨幣経済の発達により、地代は糧穀の代わりに貨幣で支払われる一方、手工業も衰退したのである。

### 3 日本と朝鮮の近代化における初期発展条件の違い

以上、日本と朝鮮の経済発展の土台となる初期の社会状態の変化の過程に関する、先行研究の成果を見た。これらからも明らかなように資本主義体制を導入する過程で、朝鮮と日本は大きな違いを見せた。日本の場合、西欧から資本主義的文化を取り入れた時期が早く、定着していく過程も明治維新を通じて早い速度で進められた。また西欧の精神と文物を自国の実情に合わせて修正し、順調な経済発展を遂げた。

一方、朝鮮の場合、儒教思想や伝統を重視するあまり、新しい文物を受け入れることに拒否感や恐れを抱き、西欧の技術だけを重視したため、社会全体における資本主義体制の導入時期と定着は日本に比べてかなり遅かった。また、西欧の文物と精神に対する排斥と抵抗が強かったため、資本主義の進行過程も遅くなった。

すなわち、西欧の文物と精神を吸収する能力と体系的アプローチにおいて、朝鮮は西欧の資本主義文化を排斥し、先進制度がすみやかに吸収されていかなかった。一方、日本は西欧の文物を自国の実情に合わせて変化させ吸収した結果、自生的かつ能動的な成長が可

---

<sup>24</sup> 박경로 외 (パク・ギョンロほか) 『한국 의 무역 성장과 경제, 사회 변화 (韓国の貿易成長経済、社会変化)』 (서울 [ソウル] : 대한 민국 역사 박물관 [大韓民国歴史博物館]、2015年)、133~173ページ。

能となった。このように朝鮮と日本は西欧の資本主義制度を受け入れる上で多くの違いを見せたため、この時期の経済発展の差が大きく現れたのである。

もう一つは、社会的インフラ施設の整備における差が挙げられる。日本は近代的な社会制度を維持することで全国的な道路網ならびに文明開化の象徴の一つとされる鉄道や、電信が整えられていた。二つ目に、日本は島国という特性で外国からの侵略がほとんどなく、幕藩体制において藩ごとの競争原理が働き、このような社会インフラ施設がよく整備されるようになったという。それに比べて、朝鮮は外国勢力の侵略が頻繁であったため、道路網などの発達を遅らせようとする動きもあった。このような不完全な道路網と立ち遅れたインフラ施設は産業発達と経済発展に大きな障害となった。

最後に、貨幣制度における違いが見られる。日本は貨幣改革を通じて多様な貨幣制度を統一し、全国的に流通できる貨幣を作り、西欧の銀行になぞらえて国立銀行制度を成立させた。このような金融制度の発達は、産業化を成すための産業資本の蓄積を可能にし、産業化を順調に進める基礎的条件となった。

一方、朝鮮は 17 世紀末になってから、貨幣制度を作った。しかし、同制度が全国的に普及しなかったため、通貨の最も重要な要素である流動性は非常に低かった。また日本では、統一した貨幣制度により金融がほとんど西欧と同じ形態に発展したのに対し、この時期の朝鮮の金融は非常に立ち遅れていた。そのため、日本は産業資本の蓄積を通じて産業の近代化を順調に育成できたが、貨幣制度が立ち遅れていた朝鮮は資本蓄積を通じた産業化を達成することはほぼ不可能であった。しかも、朝鮮における変化していく国際情勢の中での西洋勢力に対する極端な排斥は、日本の植民地になる一因と

なり、結局は東アジアで最も遅い近代化を歩むことになった。

## 四 日韓の近代化過程における言語の役割の比較

### 1 日韓の言語・教育における近代化の過程

コミュニケーションの第一の課題は、いうまでもなく、伝達したい相手にわかるように思想を表現することである。その最も基礎的な段階に、言語の問題がある。

チョン・ヨンウク（정연옥）『이토 히로부미의 교육이념으로 본 일본 근대교육성립의 한단면』（伊藤博文の教育理念からみた日本近代教育成立の一断面）では次のように論じられている。世界史的に「近代」の分類は、17～18世紀初期にみられた資本主義形成（産業革命）と市民社会の成立（市民革命）の時期を近代の始まりとしている。日本の近代もこの基準を満たし、明治維新を起点に資本主義の導入と自由民権運動を通じて近代の姿と様相を見せている。しかし、日本の「近代」といっても意識の変化がなければ、完成せず近代化を模倣しているに過ぎない。このような近代に向かう意識的变化のためには多くの道があるが、最も代表的で、すべてが帰結するのが「教育」である。

特に近代的な社会文化を形成する上で、教育政策の位置づけは非常に重要である。一国の教育は必然的に共同体的な社会構成員の生き方を代弁できる一つの指標になり得る<sup>25</sup>、という。

このように教育は、近代化の指標であり、近代化の道具であり、

---

<sup>25</sup> 정연옥（チョン・ヨンウク）『이토 히로부미의 교육이념으로 본 일본 근대교육성립의 한단면（伊藤博文の教育理念からみた日本近代教育成立一断面）』（전라남도 [全羅南道] : 한국일본어문학회 [韓國日本語文学会]、2004年）、271～272ページ。

近代化された社会の姿をのぞき見ることができる一つの尺度といえる。

朝鮮と日本は民族意識が形成される以前にも、中国の黄河文明の漢文文化圏の受け入れを基に、独自の文化パターンを形成してきた。これらは特に儒教と仏教、漢字を共有し、それぞれの言語を表記できる手段を独自で開発している。「かな」と「訓民正音<sup>26</sup>」がそれであるが、これらは根本的に違いがある。「かな」は 10 世紀以前に作られ、「古事記<sup>27</sup>」、「萬葉集<sup>28</sup>」、「物語<sup>29</sup>」などの多くの文化遺産を 10 世紀以前から保有していた。

一方、訓民正音は 15 世紀に音韻学の科学的知識をもとにして人為的に制作された音声記号であり、発生論的、形態的に漢字との関

<sup>26</sup> 「訓民正音」とは“国民を教える正しい音”という意味であり、世宗大王が 1446 年に制定公布した韓国の国字またはそれを解説した書名をいう。漢文は韓国語と容易に通じるわけではなく、学ぶには非常に難しい字であった。したがって一般庶民が学びやすい新しい文字が必要だったのだ。これを受け、世宗大王は新しい文字の「訓民正音」を創製することにした（「훈민정음（訓民正音）」NAVER、<https://terms.naver.com/entry.nhn?docId=939627&cid=47322&categoryId=47322>）。

<sup>27</sup> 712 年完成した「古事記」は漢文だが、著者である太安麻呂は日本語の表現を考慮し、変体の漢文で作った。その際、音声言語的な用法を十分に考慮した。日本文学協会編『日本文学講座 8：評論』（大修館書店、1987 年）；坪内逍遙（中村完ほか注釈）『日本近代文学大系 3：坪内逍遙集』（角川書店、1974 年）。

<sup>28</sup> 7～8 世紀にかけて完成された歌集。日本語のかなの形成に大きく寄与した。漢字を音字として意味に関係なく使用したことを初期には萬葉假名としており、その簡略体からひらがなとカタカナができて平安時代（794 年）から本格化されたと見ている（福沢諭吉〔松沢弘陽校注〕『文明論之概略』（岩波文庫、1995 年）、12 ページ）。

<sup>29</sup> 最初の物語ともいえる「うつほ物語」はこの点から、決定的な意義を持つ。平安時代、日本の貴族知識人が漢語と日本語を併用しながら制度化された枠組みとして勅撰していたことから脱して、純粋な日本語で書いた最初の作品が「うつほ物語」だが、加藤周一はこれを世界最初の長編小説と見ている（加藤周一『日本文学史序説 上』（筑摩書房、1999 年）、154 ページ）。

連性がない一種の機械的な符号である。そのため、前近代の朝鮮でハンゲルを学習することは、文化的伝統や教養の吸収とほとんど関係性がない。これに対し、その時代の日本では「かな」の習得は多様な文化産物に対する学習の共有につながった。

日本は、近代以前にもこのような自国の言語になっていく文化産物を実体と理解して、部分的に科学的に理解する学問的伝統を樹立した。本居宣長（1730年～1801年）の「古事記」研究など国学研究がこれに該当している<sup>30</sup>。朝鮮にはこのように伝統文化を科学的に研究するものが存在しなかったが、これは朝鮮人の知的教養形成過程で自国文化の実体に対する認識が足りなかったためである。これは漢文学と区別される伝統文化が豊かではなかったためでもあり、「述而不作<sup>31</sup>」の伝統に立脚し「四書五経<sup>32</sup>」の学習を中心とした学問慣習が大きな影響を及ぼしたのである。

日本の学問と比較した場合のもう一つの違いは、洋学の早い受け入れである。日本の洋学はアジアに本格的な近代化が起きた19世紀以降より、はるかに古い時期から存在してきた。日本の洋学が本格化したのは、江戸時代（1603年～1867年）と見ることができ、洋学の中心である「和蘭学」の中心的な内容は医学、大砲鑄造、築城術など実用学問であり、徳川幕府はこれを特定地域（長崎）、特定学問（医学、病学など）で統制しつつも地道に吸収してきた。このため、西洋という存在が日本の知識層には全く見慣れないもので

---

<sup>30</sup> 加藤周一『日本文学史序説下』（筑摩書房、1999年）、203ページ。

<sup>31</sup> 「述而不作」とは著述したものであり、創作したものではないという言葉で、著述に対する謙讓を表した意味である。

<sup>32</sup> 「四書五経」とは儒学入門の基本書である儒家の經典で「四書」は論語、孟子、大學、中庸を称し、「五経」とは詩經、書經、易經の三經と春秋、禮記のことである。

はなかったのである。

## 2 19世紀後半の朝鮮の言語教育における西洋文化受容の状況

日本の言語教育的近代化の過程で現れた特徴を要約すると以下のようになる。

日本は近代以前から探求対象の実体を規定する学籍方法論を文献研究で部分的に有していた。徳川幕府時代以降は制限的ではあるが、「和蘭学」を受け入れ、いつでも西欧の学術を本格的に受け入れることができる知的集団を形成していた。

このような風土を基にして 19世紀後半から本格的に洋学が日本人に浸透し始め、知識人が少年期に身につけた漢学の知識と青年期に学んだ西洋の言葉に対する知識が融合し、西洋語を漢文口調で翻訳する時期が来る。すなわち、明治時代以降に西洋の影響を受けて本格的に行われた日本の学術近代化は、決して漢学を排斥するものではなかったことに注意しなければならない。

前述した E・O ライシャワーの『アジアの中の日本の役割』によれば、日本における近代的陸海軍の創設は同時に近代的兵器産業の創造をも必要とするものであった。しかし、これは伝統的経済に対し断絶を意味する唯一の例ではなかったし、またその最も重要な例でもなかったのである。すでに鉄道や電信のような新しい運輸・通信施設は、政治的統一を保つために必要とされていたし、また西洋の軍艦とともに日本に渡来し、日本の独立にとっては軍艦の大砲に匹敵するほどの脅威となっていた安価な機械製品についても、対策が必要だったのである。優勢な西洋の軍事力の前に、日本人は門戸を開放して外国商品を買入れ、西洋からの輸入品に対しては条約によって、最も低率の関税障壁を設けることに甘んじなくてはなら

なかったのである。

その結果、安価な綿製品などが流入して日本の手工業に打撃を与え、深刻な金の流出を招いたのだった。こうして日本は、大きな金融危機に見舞われ、せつかくの軍事改革も画餅に帰すかと思われたのである。さらに、失業した封建藩士や手工業の職人などの救済も緊急の課題であった。

当時の要請に応えるには、単に軍事産業のみでは十分でなかったもので、日本の指導者は一大工業化計画に乗り出さなくてはならなかった。まもなく、電信網が全国に張りめぐらされ、一部の主要都市を結ぶ 鉄道網が完成した。新しく紡績・織物産業が生まれ、しだいに外国商の輸入を押えていき、繰り取り作業が機械化され、当時極めて必要視とされていた外貨の取得源となったのである。このように軍需産業のほかに、軽工業や交通・通信産業において、日本は急速な工業化への歩みを踏み出した。

とはいえ工業化に成功し、軍事技術と政治の近代化を図るため、日本人は新しくより幅広い知識の普及を必要とした。日本の軍事力にとって、西洋の科学教育が軍艦と同じように不可欠のものであること、徴兵された兵隊は鉄砲も打てるし命令文も読めなくてはならないこと、工場技術者は蒸気機関車と同じくらい大切なものであることなどは、日本の指導者は当初からよく認識していた。

このようにして日本は、大がかりな教育改革に踏みきることになった。一世代あるいは二世代を経ないうちに、普通初等教育は、新聞の読解力をもつのが当然であるとされた農民や工場労働者を生み出し、また各種の高等教育機関が設けられ、本来求めた科学知識のほかに、多種多様の西洋の思想も吸収した高度の教養人を数多く育てたのである。このような大きな変革は、1890年までに大幅に進

んでいた<sup>33</sup>、と論じられている。

ライシャワーの日本の近代化に関するこのような分析を踏まえて考えると、19世紀後半から西洋の学術を受け入れた朝鮮の状況は、これとはかなり異なっていた。朝鮮の場合、前近代的な漢学者はほぼ死ぬまで漢学だけを言語として意図的に西洋の学問を受け入れなかった。その上に、西洋の学問を学習して受け入れた者は、漢学に対する素養を備えていない場合がほとんどであった。

朝鮮で伝統的な漢学者集団が19世紀後半に選べる学習の選択肢として、西洋の学術が対象にされなかった理由は、朝鮮が政治的に危機状態であったことと、これによる政治的偏見ともいえる雰囲気が多く知識人を古い儒教文化に固執させていったという点に見出せる。彼らは同時代の日本の知識人と違って、広く新しい知識を学ぶ機会がなかったのにも関わらず、啓蒙には乗り出さなければならぬ、という矛盾した位置にあった。

日本は、漢字を含む和文体と洋学の体験を土台として近代化に先行することができ、それは漢字を捨てるのではなく活用する道に通じていった。しかし、朝鮮では漢字に慣れている世代が新しい洋学を習得しないことで、初期の洋学を受け入れるべく世代の専門性が足りず否定的な効果となった。

英米の音声言語が公用語になりにくい東アジアの風土を考えた時、文章の実質形態は大部分漢語の語彙に頼らざるを得ない状況で、洋学受容の主体的専門性は漢字と漢語に関する知識以外の要素は考えにくい。日本は近代化の過程で漢語に対する伝統的な知識を活用して西洋語を翻訳することができたといえる。

韓国の言語・教育と近代化の関係に関しては、未だ研究業績が少

---

<sup>33</sup> 前掲『アジアの中の日本の役割』、87～89ページ。

なく、更なる実証的研究成果が必要と思われる。

## 五 おわりに

18世紀半ば以降、韓・日・中三国は国家内部の意志ではなく、外国勢力との通商によって近代化という変化を受け入れないといけないう状況であった。これは中華思想を土台に構築されてきた国際関係や封建秩序を完全に变化させる様相で展開された。西洋勢力の直接、間接的な侵略に対応できないことは三国とも分かっていたが、それに対処する方法は互いに異なるため、近代化の過程と進む速度は国によって異なる様相を呈した。

アジア諸国の中で近代化に成功したと評価される日本は、中国と朝鮮に比べて比較的西洋に対する拒否感が少なく、明治時代にはむしろ積極的に西洋との交流を行った。

しかし、中国と朝鮮の場合には西洋に対する拒否感が強く、特に中国の場合、中国文明はおよそ5千年の間、世界最高の文明とされ、欧州がそれに肩を並べることができたのはようやく18世紀頃になってからであった。そのため、19世紀に入って、西洋文明の優越性が明確になった際にも支配階級の中に定着していた中華思想を変えようとせず、16世紀以降の制限的鎖国政策で、東アジアにおいては比較的西洋の動向と接しやすかったにもかかわらず、近代化を実現するまで長い時間を浪費することになる。

朝鮮もまた時代の変化に敏感とはいえず、斥洋斥和思想を持続することで、自主的な近代化に失敗した。

19世紀の近代化という変革が必要な時期に社会全般的な改革をせず、中華思想に固執して部分的な近代化をしようとした中国と朝鮮の消極的な態度は、近代化や変革の最大の敵であったといえる。

植民地による近代化を経験した韓国は、その歴史を繰り返さないために近代化に成功した日本の事例を注意深く分析する必要があるといえる。このような歴史を基に現代社会の国際秩序に対する理解を深め、社会内部の発展のための原動力を確保する姿勢が必要と思われる。

(寄稿：2020年11月11日、採用：2021年6月25日)

# 日韓近代化過程の比較與語言的功能： 從既有的研究學習

李松

(日本拓殖大學大學院經濟學研究科主修國際關係博士生)

## 【摘要】

本文為奠基於目前既有關於日本與韓國近代化研究實績的基礎上，進行相關比較・檢討。一個是與歐美比肩、共同帶動全球經濟發展的日本，另一個則是歷經外國勢力侵略與殖民統治，曾是看似連一點光復的可能性都不存在的國家，如今成為東北亞先進國家之一的韓國，這兩個國家究竟實現了什麼樣的經濟發展，而在達到現在的程度之前又歷經了多少試錯過程？

回答這些疑問點的第一步，應該是先了解日韓在推動近代化的過程與因應態度，接著理解那段過程帶來的影響。此外，在推動近代化的過程中，語言與教育的角色特別受到關注。一個國家在維持運作、發展的過程中，語言與教育擔負的功能相當重要。全球近代化的進程是由西歐推動，其他國家也將之視為範本並追求發展。這種情況也同樣出現在語言・教育層面。因此，從日韓發展近代性語言・教育的側面觀察，考察其特殊性，可推測出，日本事實上在初期階段，便清楚掌握建構近代化社會的根本。

關鍵字：近代化、經濟發展、語言、教育、日韓關係

# Comparison of Modernization and Language Roles of Japan and South Korea: Based on the Previous Research

*Song Lee*

Doctor of International Relations, Graduate School of Economics of Takushoku University

## 【Abstract】

This article compares and examines modernization of Japan and Korea based on existing research achievements on modernization of these two countries. What kind of trial and error have the two countries achieved and experienced in the past, with Japan, in leading the world economy along with the West, and with Korea, in becoming one of Northeast Asia's most developed countries?

The first step in answering this question is to understand the process, response, and impact of modernization between Japan and South Korea. We also pay particular attention to the role of language and education in the modernization process. Language and education play an enormous role in maintaining and developing a nation. Modernization was preceded by Western Europe, in which both Japan and South Korea used as a model in pursuing modernization. Such figures are the same in terms of language and education. Therefore, by examining the peculiarities of modern language and education between Japan and South Korea, I think we can grasp the fundamentals of the early modern society that Japan established.

**Keywords:** Modernization, Economic Development, Language, Education, Japan-South Korea Relations

## 〈参考文献〉

- 石井寛治『日本の産業革命一日清・日露戦争から考える』（朝日新聞社、1997年）。
- Ishii, Kanji, *Nihon no sangyo kakumei---nisshin nichirosenso kara kangaueru [The Industrial Revolution in Japan---Thinking from the Sino-Japanese War]*, Asahi Shimbun, 1997.
- 李松（イ・ソン）「韓国における言語・教育政策からみた経済発展と近代化—開港前後（19世紀）から韓国併合直後（1920年まで）を中心として」『経済学研究：経済・国際・地域』通巻第46号（2019年3月）。
- Lee, Song, “Kankoku ni okeru gengo, kyoiku seisaku kara mita keizai hatten to kindai---kaiko zengo (19 seiki) kara kankoku heigo chokugo (1920 nen made) wo chushin to shite” [Economic development and modernization in terms of language and education policies in Korea - centered on the time before and after the opening of the port (19th century) and immediately after the annexation of Korea (1920)], *Journal of economics, international relations and area studies*, Vol.46, March 2019.
- 加藤周一『日本文学史序説 上』（筑摩書房、1999年）。
- Kato, Shuichi, *Nihon bungakushi josetsu, jo [Introduction to the History of Japanese Literature, Volume One]*, Chikuma Shobo, 1999.
- 加藤周一『日本文学史序説 下』（筑摩書房、1999年）。
- Kato, Shuichi, *Nihon bungakushi josetsu, ge [Introduction to the History of Japanese Literature, Volume Two]*, Chikuma Shobo, 1999.
- 高橋豊『日本の近代化を支えた文化外交の軌跡』（福村出版、2015年）。
- Takahashi, Yutaka, *Nihon no kindaika wo sasaeta bunka gaiko no kiseki [The Trail of Culture and Diplomacy Supporting Japan's Modernization]*, Fukumura Publishing, 2015.
- 坪内逍遙（中村完ほか注釈）『日本近代文学大系3：坪内逍遙集』（角川書店、1974年）。
- Tsubouchi, Shoyo, annotated by Nakamura, Kan, *Nihon kindai bungaku taikai 3: Tsubouchi shoyo shu [Japanese Modern Literature University 3: Tsubouchi Shoyo Collection]*, Kadokawa Shoten, 1974.
- 富永健一『日本の近代化と社会変動』（講談社、1991年）。
- Tominaga, Kenichi, *Nihon no kindaika to shakai hendo [Modernization and Social Change in Japan]*, Kodansha Co., Ltd., 1991.
- 富永健一「近代化」『ブリタニカ国際大百科 改訂版』第五卷（1988年）、771～775ページ。
- Tominaga, Kenichi, “Kindaika” [Modernization], *Buritanika kokusai daihyakka kaiteiban [British International Encyclopedia Revised Edition]*, Vol.5, 1988, pp.771-775.
- 日本文学協会編『日本文学講座8：評論』大修館書店、1987年。
- Japan Literature Association eds., *Nihon bungaku koza 8: hyoron [Japan Literature Course 8: Criticism]*, Taishukan Shoten, 1987.
- 福澤諭吉（松沢弘陽 校注）『文明論之概略』（岩波文庫、1995年）。

- Fukusawa, Yukichi, revised and annotated by Matsuzawa, Hiroaki, *Bunmeiron no gairyaku [An Outline of a Theory of Civilization]*, Iwanami Bunko, 1995.
- 古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』(京都大学人文科学研究所、1994年)。
- Furuya, Tetsuo, eds., *Kindai nihon no ajia ninshiki [Modern Japanese Asia Consciousness]*, Institute for Research in Humanities, Kyoto University, 1994.
- ライシャワー, E. O. (西山千、伊藤拓一訳)『アジアの中の日本の役割』(徳間書店、1969年)。
- Reiachauer, Edwin Oldfather, trans. by Nishiyama, Sen and Ito, Takuichi, *Ajia no naka no nihon no yakuwari [The Role of Japan in Asia]*, Tokuma Shoten, 1969.
- 渡辺利夫『決定版・脱亜論』(有鵬社、2018年)。
- Watanabe, Toshio, *Ketteiban, datsuaron [Toshio Watanabe's de-Asiainsm]*, Ikuhoshia, 2018.
- McClelland, D., *The achieving society* (Princeton, N.J.: Van Nostrand, 1961).
- Rogers, Everett M., *Diffusion of innovation* (New York: Free Press, 1962).
- Rostow, W. W., *The Process of Economic Growth* (London: Oxford University Press, 1952).
- 「동학 농민 운동 (東學農民運動)」NAVER, <https://terms.naver.com/entry.nhn?docId=3560090&cid=47306&categoryId=47306>.
- “Donghaknongmin undong” [Donghak Peasant Revolution], NAVER.
- 「훈민정음 (訓民正音)」NAVER, <https://terms.naver.com/entry.nhn?docId=939627&cid=47322&categoryId=47322>.
- “Hunmin jeongeum” [The Hangul alphabet], NAVER.
- 박경로 외 (박·ギョンロほか)『한국 의 무역 성장과 경제, 사회 변화 (韓國の貿易成長經濟、社会变化)』(서울: 대한 민국 역사 박물관、2015年)。
- Park, Kyung-ro, et al., *Hangug ui muyeog seongjang-gwa gyeongje, sahoe byeonhwa [Korea's Trade Growth, Economic and Social Change]*, Seoul: Museum of Korean History, 2015.
- 오송제 (オ・ソンジエ)『근대 중국의 개항 도시와 동아시아 (近代中国の開港都市と東アジア)』(인천: 인하대학교한국학연구소、2012年)。
- O, Songje, *Geundae junggugui gaehang dosiwa dongasia [Modern China's Open Port Cities and East Asia]*, Incheon: Center for Korean Studies of Inha University, 2012.
- 이명규 (イ・ミョンギュ)『한국경제의 이해 (韓國經濟の理解)』(경기도: 법문사、2006年)。
- Lee, Myung-kyu, *Hanguggyeongje ui ihae [Understanding the Korean Economy]*, Gyeonggi-do: Beobmunsa, 2006.
- 이광석 옮긴이 (イ・グァンソク 訳)、E. O. 라이샤워 (E. O. ライシャワー)『일본 근대화론 (日本近代化論)』(서울: 소화출판사、1997年)。
- Lee Kwang Seok, trans., Edwin Oldfather Reiachauer, *Ilbongundaehwaron [Theory of Japanese modernization]*, Seoul: Sowha Publishing Company, 1997.
- 정연옥 (チョン・ヨンウク)『이토 히로부미의 교육이념으로 본 일본 근대교육성립의 한 단면 (伊藤博の教育理念からみた日本近代教育成立の一断面)』(전라남

도 : 한국일본어문학회, 2004年)。

Jeong, Yeon-wook, *Ito hibumiui gyoyuginyeomeulo bon ilbon geundaegyoyugseonglibui handanmyeon*, [One Section of the Establishment of Modern Education in Japan Based on Ito Hirobumi's Ideology of Education], Jeollanamdo: Korean Society for Japanese Literature, 2004.

하원호 (ハ・ウオンホ) 『동아시아의 세계체제 편입과 한국사회의 변동 (東アジアの世界体制編入と韓国社会の変動)』 (서울 : 중앙대학교중앙사학연구소, 2008年)。

Ha, Wonho, *Dongasiaui segyecheje pyeonibgwa hangugsahoeui byeondong* [Incorporation of East Asia's World System and Changes in Korean Society], Seoul: Chung-Ang University Central Institute of History, 2008.

